

岩波国語辞典

第八版

【編】

西尾 美

岩瀬悦太郎

水谷静夫

柏野和佳子

星野和子

丸山直子



岩波書店

ないわ(内務) ①国内の政務。また、国内行政。②軍政生活で、日常生活に関する幕内での仕事。「一班」ないめ(内面) ①名・その他 表向きでない、内々の命令。内々に命令する。ないめん(内面) ①外面に對し物の内側。内部。②人の表面・外面に對し精神・心理の方面。「一描写」ないものねだり(無知物ねだり) そこにない物を無理やりに言うこと(はじかること)。ないや(内野) ①野球のグラウンドで、本塁・一塁・二塁・三塁を結んだ内側。「一安打」②内野手としての内野手を守る選手。ないやく(内約) ①名・その他 内々に約束すること。うちへの取決め。ないゆう(内憂) ①うちとしての、特に国内の心配。ないよう(内憂) ①名・その他 内憂。ないやう(内容) 物事の名かみ。②ある形をとるものを満たす事物柄。「小包の二物」③事物・現象を成り立たせている要素。④形式・言語の「一言語で表されている事物」「一のぞしに講義」。ないやう(内容) ①名・その他 内容。②用。ないらん(内亂) 国内の騒動。特に、政府とそれに対する勢力との武力による闘争。ないらん(内容) ①名・その他 内亂に見ること。決められた正式の手続きによらずに見ること。「一に供する」と「一般に公開する前に、限られた人だけが見ること」「一合」。ないりく(内陸) 海岸から遠い陸地の内部。①きこ(一氣度) 海洋の影響を直接受けない内陸地方の気候。湿度が低く、昼夜夏冬の気温の差が大きい。大使(生気候)。②海江気候。①く(一國) 国境から見て他國の陸地に接し、海に面していない國。例・スイス。ないりく(内陸山) 二重火山の、新しく噴火した内側の、新しく噴出した山。

ナイロン類に似た風合(ふうあひ)をもち、強度の高い化学合成繊維。△nylon もと商標名。
 ナイン野球チームの選手「A高校十が球場に到着した二・三スー」▽詰(じゅう九)一チーム九人で競技するから。
 なう^{ナウ}(一編へ)(五他)よりを掛けて縄などを作る。あきなど。
 なうて[名うて]ノダ有名な評判が高い。「一の悪態」
 なお^{ナオ}(正)①種子から芽を出して伸びた。(移植用の)若い植物。▽多くは草本植物のを指し、木本のは普通「苗」と言う。②種(こ)の苗(い)。
 なおきば[苗木]樹木の苗。
 なえご^{ナエゴ}(苗木)種をまいて苗をはえそせ育てる所。
 なえる^{ナエル}養育(よやういく)①一旦①(病氣のため)手や足の力が抜ける。またしりぞき感(かん)がなくなる。「足がぬけ」②氣力が抜ける。ぐったりする。③長く着たため暑熱(じゆねつ)がたたまになく。④しおれる。
 なおほ^{ナオホ}猶(なほ)尚(なお)①副詞②他の事情・状態が変わったのに相違ない。やはり。「今でも一貫(いつくわん)だ」④そのうえ更に。「層(そう)一多(いちた)くの人(ひと)」「それなら一の事(こと)」「ちとよし口語(こうご)では主に連用形・連体形を生じてちとちと……のようだ」⑤置換(ていかん)大油(たいあぶら)の一つである▽めは漢文訓読に出た表現(げん)に使(つか)ある字句(しきふ)を述べた後でそれに言い添(そ)える時に「さう」は古語(こご)話様(わさむか)でした。「結構(けいこう)なおみやげまで頂戴(とうがい)です」して様
 なおかつ⑥[目出づ][運慶]⑦劇画的(げきかくてき)⑧そのうえにまだ⑨「それじゃや」はり。
 なおたらは[高麗(こうらい)餅(もち)]、「ノダ」そのうえ、ますますそれにより増し。
 なおたら詔(みことたち)余(あま)主尊(すみみ)を問はずらん(問)にずるもま。おもそ。「規則(きそく)を」にする「告旨(こしめ)を」一

状態に突る。これ「**い**れどやみか」④もこのように正常なまは健康な状態になる。「二われたつがー(一)修繕せられた」(風邪**ひ**)が一「切り修繕した」。(**相動**が主となる)。△**疾**(疾、怪我)の場合には「治る」と書く。⑤今の状態が改善する。⑦しかるべき地位にする。⑧「本書」に「あととぎに」「一乗物・馬車などに今この席を二等級を改めて上級一等席に」「二等席に」「二つと」「二安」勢を正してきちんと座る。「いま言つて聞かせるか、そこへ」「りないさ」。△のはかり方土屋。**回圖**
癒える。治癒。平癒。快癒。全癒。根治。全治。全佳。回復。回復。秋夜床下。退院
なれど「若折れ」以前からのせつかの名誉が傷つくこと。
な【中・仲】①端や境界で区切られた。そのあらだ。
【下】もとど。(二の)一でもすぐれているのは「うえなか。したなか。みななか」等。三分した中部部分分を指すのが「真裏」の中。中間。内部。④そればかりく状態の時。「遠」の一を出掛け「お世しいの御出向、恋煩に存じます」。▽第二例で一照りつける一で熱誠を展開するような場合にも「こころを付けなさい。現在には普通に通じてゐる。②二つのものあいだ。人々との間から」「あの二人は一がいいい。人の交際関係については仲と書く。③三人兄弟の第二番目の者。④一か月の中間。中旬。⑤正月の十日。⑥「俗来東京・吉原・大阪で新町の遊郭を指した。【下】遊郭の中の家。
ながあ【長閑】幾日も降り続く雨。霖雨(いん)。ながい【作田】料理屋旅館など、客の応対をする女性。▽もと殿中より生産職の奥向きでそこに勤める女性が居た筈。またその女性。
な【い】一【永】一形。物。空間。時間。または抽象的なものについて。ある(場)の片から他の(端)までの距離が大きい。①類。「鹿の頭は一十二年月を経る」「話せば一ことながら一校長の訓話時

なにかゝるなかに終つてゐない。――なにかの線ける二気にな
 十一くの一なりしてゐない。――なにかの動作に二気がな
 い。――なにかの物には二種力や勢力のある者にはな
 者にはなかないから、反作用に從つてゐるのが
 一。――二邊通長を使うが、時間間隔は二邊通は「永」も
 使ふ。――二邊通の方向の観点が加われれば「高い」「深い」
 「広い」などと言う。なお、一ながき。ながの。――
 なにか。――「長屋」(客・主)長い時間同じ場に(すわつ
 ていること)。「長」は無用。
 なにかい。――「長生」(名・主)長い生きること。長命。
 なにかいす。――「長子」(名・主)幾人お掛りられるより、一嗣に長く
 一を作つた嫡子。
 なにかい。――「長生真壽」長生一メートルほどになる塊
 根を食用にする。――野生多年草。――どうろに這つて食へ
 る。マヤのみの。――「長生草」はじねんじよ。
 なにかい。――「中入り」相撲は、二客などこの興行の途
 中にはさむしむしとくつて休む時間。――「後の取組」二
 なから歌われ、三代目片岡(長)は長三郎が曲風を統一
 した三味線歌謡の歌曲。歌謡は長三郎が海軍軍楽隊の長
 から取る。歌舞伎の伴奏にも使う。三味線。――「長
 歌」上方(三味線歌謡。端歌)三味線歌謡。――「連歌」連歌
 詞をもつ三味線歌謡。――「長歌」三味線歌謡。――「うた」歌謡
 なかうり。――「中売」興行場や長距離列車の中で飲食
 物を売り歩くこと。その売り手。
 なか。――「長柄」柄が長いこと。柄の長い道具。説話
 の馬上の蜀人などにさししかける、柄の長いかさ。①
 柄が長い鎌子(こ)。②柄の長さが三間ほど(五メー
 トル)弱ある楯(たて)。③「長」馬車(牛車)の前方
 に長く出た平行な二本の棒。その前端にくびきを
 渡し、馬や牛をつないで車をひかせる。
 なか。――「長道」(名・主)逃げるもの、身のを遠くま
 で追ひかけること。
 なか。――「中落ち」三枚におろした魚の、身のついた

やめる「止める・辞める・免れる・止める」(十一)
 他「今まで続けていた事を」自然の成りに任せて置
 面の事柄で、あつたけなくする。まだしつこくして
 いた事を思ひいふ事。「止む」不敬語で居る。
 「閉居する」といふことになつた。「止む」から音読み
 一ぬる「旅行を」①「皇親」をから去る。「止す」
 「罷」(敬語)一ぬて年金生活に入る。△「止む」
 「止ま」といふことと読めば別の語。
 やめる「免れる」①「運命」(運命)で病氣になつて
 いる。「一時を暇をある時」△「止む」に文語助動
 動語「に」を接合形付けた形。①「止む」痛く或
 びる。また、病氣を苦した。「後腹(は)が」△古風
 な言い方。
 やめる「後置」明るく所では目が見えるのに、薄暗い
 所では見えなくなる意味(人)。ビタミンAの欠乏
 によつて起る。①「止す」
 やめる「置居事」来つて独身でいる者。△元来は女を
 言つたが、今は男にも使へ。区別するに「男」△女
 一「止む」
 やめる「(半世)」トカチに似て平たく、黒みがかった
 灰色の爬虫(ワニ)類。捕の要が成熟のようになつてい
 て、(家)への壁などに咬つて、咬山、虫を捕食
 する。△やもり科の爬虫類の総称。
 ややあらねば「(ヤ)ヤリ」に言ふ。
 やや「願(に)」①希望または申し出、今一はかり
 「一願い」すくねてゐる「一あつて」しほらく
 して①物事の要合点のさう。②「一(なん)めす
 れば」「一する」といふことなりながらあらねば
 であるが、そのとおり)といふ事である。③「一」な
 らない。次第に「やをに救の願(は)はたむ」△希
 望(望)の意。
 ややしら「(半世)」になつてゐる。複雑でやこい
 だ。「半世(は)を」△やこいしら「と」言ふ。①
 止む
 やや「戦線」(交)交戦がはかた。

やまに「**生**」**書**三。
 やら「**終**」**不**確に**終**を**表**すのに**使**う。「いづ
 行た(た)」「いづしだの」「いづで**宛**か一**衆**
 てる」「**ア**やあらむやあらむやふとやふと」と
 感してとくま。
 やら「**動**」の**主**に**不定**を**表**す語と
 共に**使**つて**不**確な**氣持**に**言**うのに**使**う。「いこ
 一なるかも**與**ねた」「だれ一**笑**つていそ」「何
 一泣けてる語だ」「一(一)と」これで一**段**
 落た。「山田君一」**書**は……」例としてあげる
 には、「トラン一かわら一いそな物か飛んで来
 た」「近く一騒ぐ一、大變な事になった」「試験や何
 一があつたに」
 やら「**表**」の**語**に**以**て「一の**語**」**夜**になつて
 ぬ。
 やら**い**天来、竹木をあらく組んだ、坂の隅に「竹
 一」
 やら**す**「**五**他」(後)「よくない」と**定**する。して
 やら「**酒**を」「**大**衆**飲**」
 やと「**の**」**動**に**連**するに「**連**」まるで来客を帰
 ちならたどるかのやうに隣つて来る間。
 やと「**さ**」**連**に「**後**」人に与へることはせ
 ず「**取**」**一**ける「**方**」であること。「いづ一ではい
 一」
 やとを**報**達などで、書前に**連**者として受れて事を
 連のまゝながら、自條に起きだかのやうに**終**うこ
 と。
 やら**な**「**動**」**連**用形に付け、**連**修飾語を作る……
 一あらな。安全には……」**一**「**語**一」**一**
 やり**は**「**連**」の**先**に**終**「**と**」がた**細**長、
 又をつけた**詞**語。また「**を**」**連**者**終**。結語(を)
 「**竹**一」**を**つくる(「**連**」を導いて**攻**め**の**体**動**を)
 する。日曜朝に、政談や非談を引ると「一が降つて
 か」(と)な**連**者(と)の「一」**一**に**生**くる(「**氣**」
 氣無病)「**生**」**生**た(と)「一」**一**に**生**くる(「**氣**」
 (後)に**連**者を持たせる體と)「**使**」の身分の武士)②

う」のやを重畳に言ひ方。うううとなら
 たりといふる【通り掲げる】(十一他)「ううなる
 のやを重畳に言ひ方」
 やりたす【通り主】嫌(む)を主玉のうに、自由に使ひ
 ますこと。まだ、人を煩の體志に於けて容き耐す
 こと。「一に免るに」輕して、非難攻撃の攻撃に取り
 付くる
 やりつば【通り次】「通り次」原形をうたふこと。その
 ままで録事しなるといふ。△例(四)の場合にも言
 う。題に於て本人は動かない
 やりて【通り主】△題事のてきはきと處理して行
 く脚のある人。教師等。なかなかのてで、ひと
 で取り回して行く。△女刑屋で、楚女を取り縛ま
 り、題事の取り回して行く者ぞ。「一ははあ」
 やりて【通り】「て」を主
 やりといふ【通り掲げる】(十一他)目や事物をお
 しまい、まで完全に行ひ、最後の目的を達す。しと
 する。「通りたてはきうたう」
 やりとい【通り取り】(十一他)相手に差つたり、相
 手から取り取つたりすること。とりかわつこと
 「教しうする」△例の題事、題事の結構、言葉を
 かわすこと口論(口論)の受け受ふこと、言議
 たりなす【通り掲げる】(十一他)理やてなかつたり
 未決したりした事を定めてなかつたり。一、言する
 「スアトを」一「アトを」字讀(アト)をうと決した
 やりなけ【通り主】嫌(む)を主玉の一種目、嫌(む)を掲げ
 てその果をば難を置く
 やりは【通り懸】もつてゆきとこと。「目の一に困
 る」
 やりなす【通り懸】一條の言が、成る身の嫌(む)をす
 ちまふまいよに突か出して難をさること。「一を」作
 る
 やりなす【通り次】△種込みなどに水を与ふる
 こと。「種なま一する」△庭に水を引入れて灌
 れるようにしたる

なりとも〔権柄(も)〕柄(を)持て、主人の供をする義理。
 やる〔遣ふ〕〔遣ふ〕①一方から他方へ移らせる。②行かせる。「朝を大学に―」「彼を彼に―」。遣はれる。「市は朝(を)―」「一り遣はす」。△右方の事情がはつきりとはわからぬ時に差し合わせるという氣遣(を)をせうとするが多い。「人ぞ―」と問ひ合わせる。△右方に轉むとするという又柄の姿もある。
 ③思ふに轉ずる。「憂(を)ぞ遣はる」。④恩恵以下のものに与える。「子供に小遣(を)―」。△又遣はる(を)⑤⑥
 ⑦動詞連用形+助詞に「て」を接して⑧(感嘆詞)に用いて、…する義を表す。「これ見て―」「―派で―」。⑨(怒り)憎みの感情で進んで相手を不気遣(を)など義を表す。「金もさぐんで―」「―なりつて―」。⑩そればかりでする過激な。「毒を飲んで死んで―」。△例のは丁寧に言う時には「…とある」
 ⑪(かた)に選んでする。「さうを―」「―のだぞ」「うまくしとおおせだぞ」「ちよと一杯―さう」(ちよと、程度を叙する)。「―と行けなら」「維持せよ」。特に「年が立たない」「旦那がコロにされた」「おそれれた」「夢中に―られた野郎」。また「みづから」の義は「みづから」(好ましくなく)と違つて、その身に引き取つてそれがあるため自分の意志の結果であるかのように整理することがある。「五年間、旦那様(を)―した」。△本来は、うまくゆくならみづから―事をもとめてさういふに言う。従つて人に知つて「何ぞ―られてゐるのですか」ではなく、「それこそさう思つた」「それで―なされて」と言う方が丁寧。
 ⑫動詞連用形に付いて、その動作の旁に表す。「晴れ―らぬ雲」△打消しを伴つて使ひ、「しおやせぬ心遣(を)」⑬その動作を遂くまで及ぼす義を表す。「ながめ」
 「ながめ」

なり。
りちち【**羅命**】 徒奇・聲常・事に與を持ててそれ
をもちけるがことなり。「**假令**」「**寧牛**」
りちちち【**羅語**】 定羅語也。ぬりちちちとて許さ
れている期間。◎【**羅語**】→ちちち【**漢語**】
りちちち【**羅語**・**漢語**】(名・ス他) 異くだして麗
(註)も、それによつていひぬ(非麗)なり。△**漢語**
では「**羅語**」の表記を使つて。
りちちちち【**西語**】→コノバズ。◎「**三角定木**
」とては(羅語・漢語)とては「**直**」
りちちちち【**西語**】◎西方の國々ならも 羅語と漢
語とでは半通と半通。◎【**直語**】
りちちち【**西語**】◎「**直**ちちち」の略。西端を
切つた國々口のなりをさうと云ふ。
りちちち【**漢語**】 西用・使用した(する)ことに対し
てをさうとおねは。
りちち【**漢語**】 皇・御とてものに依りて皇。例 綱
を皇・ちちちち・むね。
りちちち【**羅語**】 領土および領海の上空。二に對
しては所屬して國家が完全な排他の特權權を行使
する。「**一單臣**」
りちち【**漢語**】→ちちち【**直語**】
りちちち【**今文**】「**一**」の言。尊帝制政の時代に、今の
憲法以外に家議の必要から設けた官。例、中納言
(註)・卿人所(註)。
りちち【**漢語**】→ちちち【**直語**】
りちち【**漢語**】→むしなだ。
りちち【**漢語**】 刑罰の重さあること。
りちち【**漢語**】→具・其・直【**直語**】◎**漢**の思ひをめぐ
らむこと。きざり。思案「**漢**」一を起つす「**それ**は
とんだ一筋にだ」◎(名・ス他) になさずとて。
「**一**」とてくれ。
りちち【**漢文**】 皇・帝の病に起つた。
りちち【**漢語**】◎「**火**」 諸國に放つた火のよう
に、ぬくぬくしてけききするものなりといふ。

りまうに〔**風俗**〕二匹のこゝろ。徳政をきかぬたい一人
の悪習・美徳・勢力等。「一の争ひ」
りまうに〔**武臣**〕〔**文治**〕好ましむ状態であること。
「一は経済に懸念なり」(國司)ち
りまうに〔**武士**] 師のもの辯人。
りまうに〔**武港**] 船の出入り、泊まりに好都合な港。
「水陸の一」
りまうに〔**覇国**] 所掌している國王。
りまうに〔**實業**] (実を成する)より強、「一賣田」
りまうに〔**私利**] より利く義。私慾。
りまうに〔**私財**] ①より(親類)財産。②より人材。
「天下の一を兼ねる」
りまうに〔**良策**] それに適する優れたばかりのこと。
紙書
りまうに〔**豪族**] (名・大也)相手の立場・状態
を察すること。「なにとぞ御しくだらう」
りまうに〔**三三三**] 二三三〇・二三三〇・二三三〇
りまうに〔**皇座**] (名・大位)天皇坐すの略。「一化
に成する」→大いにいふべきこと
りまうに〔**山泊**] (衆山泊) 森林・野小家の集まる所。
△昔 古国の衆山泊に沼沢の色に落能が降した
ことがあつた
りまうに〔**待延**] 何かをする、時にものを置くための
紙(和紙)。
りまうに〔**源師**] 淵で生活を立てている人、かりゆ
きなど。④〔**湯師**] 湯をして生活を立てている人、湯
夫(ぎやう)
りまうに〔**量子**] (物理) エネルギー・電気量などある
量の物理現象がある単位量の整数倍として表される物
質。その単位量は量子と云ふ。「一より多かる」「一力
学」分々・原子・素粒子などの微視的なものの力学を取
る理論体系。「一たん一いつ」量子力学を基礎とし
て物理現象を説明しようとする物理学の総稱。
りまうに〔**命官**] 皇帝や君主など最高位の命令を出す
者を謂ふ。△これにさへしては、これは、

いれんちや「一葉集」の儀」△あつしち(二時)を肌
ではなせり。手紙、非向などて致す。
かみりやきんち(三)「榮上の君子」①とてはち。△
眼差(ばい)が縁(は)の上に隠れてゐるゝを指
ちて言ひださるゝ中国の故事による。②ねすみ。
△ひの緒。
かみりや「蓮衣」(貯蓄と持解をさる)金袋。
かみりや「蓮衣・愛蓮」(左・二)人さばりかし
ぬるゝ。特に、暴力で女性を犯すこと。
かみりや「區罰」やどきや。女婦。
かみりや「区心」道德的な態度をききまゝ区別し
正しつて行動しようとするの動機。「かみりや
「一葉だか」一とま「一和」ちちひの給美で
なるちや。らら相違にはあらず。自分の心に納得
できやうと議論し争ひつゝ物事をむづかしくする。
かみりや「区心」より区心。指日。
かみりや「区心」かみりや。
かみりや「区心」義理をききまゝに言つた語。△こ
かみりや「おつて」ほまきやものもあす。
かみりや「区心」水花・水蓮などを計るゝ。一
片(ちや)蓮花。
かみりや「蓮衣」蓮子石の所川・蓮池などの水境。お
よど環境。
かみりや「区心」(さか他)了断し承する。
かみりや「区心」(さか他)尊重をくんで承知す
る。あつちや。讀しする。
かみりや「区心」(さか他)①自分のものとする。
自分の領土とする。②改り成る。また丁承する。
かみりや「蓮衣・阿蓮」(動物)水中と陸上の両方
にすなはてる。一はら「一葉」普集動物の一類。
明王は愛蓮。愛蓮は水中にすゝみゝて呼吸し、成蓮
するゝ。陸上呼吸をせしと蓮土にすゝみゝて呼吸し、
えらと曲の両方に呼吸するものもある。例 カエリ。
イキや。かみりや。ちちや。
かみりや「区心」①男性と女性。雄性和雌性。②男

りやうさん(性根)を有するなり)。」「化他物」
りやうさん(養生) 菩提心を生起している人。学生。
りやうさん(性根) 比較的に性質があること。特に、
性質が善くならない性質であること。悪性。「一
のりやうさん」
りやうさん(罪愆) 両方に罪があるとして、両
方を贖する。「むかひ」
りやうさん(互忌) 互に忌の一つ。両方の人に対し
て異なる事を言ひ、両者を仲たがひさせ争わせない
こと。
りやうさん(儀軌) (いっしょに執行)といふ仲間の
船。
りやうさん(峻嶒) 峰から峰へと聳く様。山の麗麗。
りやうさん(両全) 両方とも完全であるさま。「両全
」
りやうさん(廢棄) (トカク) はつぎりしていて残ひ
ないさま。「一目(め)く」
りやうさん(良俗) よい風俗。習慣。「一ト反する行
」
りやうさん(兩端) 両方の利益。両方のためになるこ
と。「一を圖る」△主風。
りやうさん(兩端) りやうはじ。「一をたたく」(物事
の端から端までよく知っている)「一を拂する」(ど
ちらにつく日取風(かぜ)をする)
りやうさん(兩面) (名・又他) 二つにたまたまること。
「一対」
りやうさん(互知) (名・又他) さとり知ること。
りやうさん(良知) 人が生まれながらに持つてゐるそ
知。「良能」△素子(そご)にさる器。
りやうさん(利地) △各目的に便する土地。用地。
りやうさん(權地) 幸福等々が所有している土地。
りやうさん(權地) (名・又他) (名・又他) 採取の一種で、産石
人など、死後に残した物や所産品、保管品がみずか
ら露出した物を、裁判所が取つて持つこと。△刑事

岩波 国語辞典 第8版

1963年4月10日 第1版第1刷発行
1971年2月5日 第2版第1刷発行
1979年12月4日 第3版第1刷発行
1986年10月8日 第4版第1刷発行
1994年11月10日 第5版第1刷発行
2000年11月17日 第6版第1刷発行
2009年11月20日 第7版第1刷発行
2011年11月18日 第7版新版第1刷発行
2019年11月22日 第8版第1刷発行◎

編者 西尾実 岩淵悦太郎 水谷静夫
柏野和佳子 星野和子 丸山直子

発行者 岡本厚

発行所 株式会社 岩波書店

〒100-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111

国語辞典編集部 03-5210-4176

<https://www.iwanami.co.jp/>

印刷・出版印刷 函・精興社/加藤製図 製本・松岳社

◎ 西尾洋一, 岩淵匡, 水谷清香, 柏野和佳子,
星野和子, 丸山直子 2019

ISBN 978-4-00-080048-8 Printed in Japan